

2020.10.16 選択する未来2.0

日本自治列島構想

藤原 辰史

(京都大学人文科学研究所)

自己紹介

- 1999 京都大学総合人間学部卒業
- 2002 京都大学人間・環境学研究科中退
- 2002 京都大学人文科学研究所助手
(2006-07 ロベルト・ボッシュ医学史研究所 客員研究員)
- 2009 東京大学農学生命科学研究科講師
- 2013 京都大学人文科学研究所准教授
(2017-18 ハイデルベルク大学 カール・ヤスパーズ・センター 客員教授)



キーワード
 食、農、
 ナチズム、
 テクノロジー
 給食、飢餓
 廃棄物、発酵



問題意識
 現代史の深層
 に沈む、飢え
 への根源的な
 恐怖について。



藤原辰史：パンデミックを生きる指針 ——歴史研究のアプローチ

最終更新: 5月26日

- 1 起こりうる事態を冷徹に考える
- 2 国に希望を託せるか
- 3 家庭に希望を託せるか
- 4 スペイン風邪と新型コロナウイルス
- 5 スペイン風邪の教訓
- 6 クリオの審判

1 起こりうる事態を冷徹に考える

人間という頭でっかちな動物は、目の前の輪郭のはっきりした危機よりも、遠くの輪郭のぼやけた希望にすがりたくなる癖がある。だから、自分はきっとウイルスに感染しない、自分はそれによって死なない、職場や学校は閉鎖しない、あの国の致死率はこの国ではありえない、と多くの人たちが楽観しがちである。私もまた、その傾向を持つ人間のひとりである。

甚大な危機に接して、ほぼすべての人びとが思考の限界に突き当たる。だから、楽観主義に



ボルソナロ大統領「熱帯雨林の破壊は嘘」



日本のコロナ後の「危機」が試すのは、経済活動がいつストップしても人間が生きることのできる社会が形成されているのか。

- 海水面上昇
- 経済不況
- 南海トラフ地震などの大型地震
- 富士山の噴火
- 毎年夏の巨大大風、水害と洪水
- 鳥インフルエンザ（大規模畜産の問題）の蔓延

1 新型コロナウイルスの「抜き打ちテスト」が露わにしたもの——これまでもの問題の露呈

1. **大規模自然破壊**（とそれに由来する**気候変動**） cf: プランテーションのための森林開発によるウイルス媒介動物の棲息空間の破壊。
2. **非正規雇用労働形態**の脆弱さ
3. **言葉**の破壊（例：詭弁に矛盾。「総合的、俯瞰的」）→喫緊の課題としての言葉（=政治と人文学を担う者の生命）の信頼の回復
4. **人文学・文化**の軽視（政治と経済に、歴史と批判が希薄）→首都に国立の現代史博物館や空襲博物館がない。Cf: ベルリンの事例
5. **男性中心社会**の暴力性。コロナ後の日本の**女性**の自殺の増加（昨年同時期より187人増）、女性への**DV**、解雇の増大（内閣府男女共同参画局 調査9/30）。女性にしわ寄せが来る仕組みを根本から変えないといけませんが、議員の女性蔑視発言があとを絶たない。
6. **都市と大企業一極集中**の脆弱さ。
7. 要するに、**新自由主義**の問題の露呈。脱新自由主義

2 世界的な現象としての**新自由主義**の限界

1970年代から80年代＝歴史の転換点。サッチャー、レーガン、中曽根の「民営化」「小さな政府」の流れ。現在は水道も民営化に。

ウェンディ・ブラウン『いかにして民主主義は失われていくのか：新自由主義の見えざる攻撃』（みすず書房、2015）コロナ以前から壊れつつある**民主主義**。

- 「**ホモ・ポリティクス**」（政治的人間）の代わりに、「**ホモ・エコノミクス**」（経済的人間）に誘導するような教育。
- 「**人的資本**」を求める支配層。圧力を受ける教育現場と一般社会。
- 学問が「時代錯誤で贅沢な道楽に過ぎないとみなされる」
- 国家が経済を放任する自由主義ではなく、**経済が国家と国民を統治**する時代。（コロナで大打撃）

日本の新自由主義

- 菅義偉首相「**中小企業の再編**」（日本経済新聞2020/9/6）
- 「福祉の**ベーシックインカム一元化**」（竹中平蔵氏）
- 「小さなもの」の「大きなもの」への再編。

3 経済不況下の「ナチス化」の指標。新自由主義がもたらす過剰な統治の歴史の事例

- ① **戦争国家経済**という絶対目標のもと、**中央集権化**。
- ② **指導者原理**（Führerprinzip）と他党禁止と秘密警察によるトップダウンの完徹。話し合いの軽視。トップだけすげ替えて、組織のナチ化。強制的画一化（Gleichschaltung）。
- ③ **学問と芸術の弾圧** ゲッベルスが学問や芸術の強制的画一化。ブレーンをナチに反対しない人間で固める。**1933年の焚書**（Bücherverbrennung）。非寛容で学問の衰退
- ④ **監視システムの強化**。密告者の監視。秘密警察の増加。
- ⑤ **収容所**（Konzentrationslager）の建設

→しかし、これで指導者は批判者を失い、国際社会からの理解も得られず、**孤立**し、アイディアも**枯渇**する。歴史に汚名

→目的が強すぎて、身動きが取れなくなる。

4 エコロジカル民主主義の自治——多重な「弱目的性」

安藤昌益『統道真伝』（1752年頃）

江戸時代の秋田藩が生んだ稀有なエコロジカル民主主義者

「無上無下」「**無貴無賤**」「漏れ」「**直耕**」（土と内臓を耕す）

D. モントゴメリー＋A. ビクレー『土と内臓』（原典＝2015年）

微生物の力による、土壌と内臓の活性化。中央集権ではない**分散**モデルである「植物」の知恵。⇔世界的な土壌劣化。国際土壌年（2015）。大規模農業への警告。小規模農業の日本に追い風。が、国際連盟総会で決議された「**小農の権利宣言**」（2018）に日本は棄権。エネルギー源としての生ゴミ。

5 ミュニシパリズム（自治体主義）

- ・「コモン」（水、食、風景、土地、知識）の市場化・商品化。
⇒「**ミュニシパリズムMunicipalism**」。「**自治**」の回復。
 - ・**大学、学部の自治**：研究に没頭するゆとりを！
 - ・「**アウトソーシング**」から「**インソーシング**」へ
 - ・**バルセロナ・イン・コモン**。**新自由主義から折り返す**ヨーロッパの都市。フランスのグルノーブル市が水道民営化を拒否し、100%有機農業給食を始める。地産地消。
- =世界各地で、「**自治体主義**」の登場（岸本聡子『水道、再び公営化！』集英社新書）
- =政府は、自治体や組織の自治を、上からではなく**側面から**支える。
- =それを支える学問と科学と知識のグローバリズム（地球でのシェア）、そして貿易相手の環境を破壊しない公平な交易
- アメリカでも、中国でも、ロシアでもない、**非核自治連合**モデル。